

出題分析		
試験時間 90分	配点 100点	大問数 3題
分量（昨年比較）〔減少 <span style="border: 1px solid black;">同程度</span> 増加〕	難易度変化（昨年比較）〔 <span style="border: 1px solid black;">易化</span> 同程度 難化〕	
<p><b>【概評】</b></p> <p>大問数の3題構成は昨年と同じ。〔1〕は例年通りの大論述。文字数は昨年に続いて増加して600字、キーワードは8個に戻った。〔2〕は論述の合計字数が大幅に減って130字となった。形式は例年通り史料問題であった。〔3〕では昨年変更になった形式が維持され、また記号選択問題を含めた一問一答形式の出題が15問という点も変わりがなかった。論述の総量が減少し、大論述が文化史からの出題であった昨年より取り組みやすくなったため、全体としてはやや易しくなったと言えるだろう。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
〔1〕	1～17世紀のインド洋交易	非常に広い地域・長い時代を対象としており、整理して答案を書く力が特に求められたと言える。地域毎での整理では処理しにくい話題も含まれるため、時代毎に整理する方がよいだろう。指定語句では「モンゴル帝国」の処理が最も苦慮する点になると思われる。解答例に挙げたなかでは、扶南をカンボジアでイメージしているとインド洋沿岸と想起出来ず書き落としてしまうかもしれない。東南アジアのインド化や島嶼部のイスラーム化についてももう少し詳細な説明を加えたり、アクスム王国やヴィジャヤナガル王国、ポルトガル進出後の東南アジアのイスラム諸王朝について触れたりした答案もありうる。昨年と同様、問題の要求がかなり広く、合致する要素を全て答案に盛り込むことは不可能なので、ある程度の取捨選択が必要になってくる。	標準

〔2〕	聖ゲオルギオスのドラゴン退治伝説	史料が複数掲載されているが、ほとんど読まなくても解答が可能である。出題自体は様々な時代・地域からなされた。問3(1)の贖宥状に関する論述は、字数が問題の要求に対しやや多いので苦慮したかもしれない。問7(2)の論述はポーツマス条約に対する日本国内での不満について問うもので、歴史総合を意識したものか。こちらも字数を多く感じたかもしれない。他の短答記述や記号選択は易しく、落とせない。	やや易
〔3〕	人間の集団の歴史	ほとんどの問題は基礎から標準レベルであった。問4、漢人は金の統治下、南人は南宋統治下にいた人々に対して使われた。そのため、女真人も漢人として区分された。問5(2)の大コロンビア共和国はやや細かい。(3)は歴史総合的出題。問6、年代順という指示を見落とさないように。ECSCは経済統合の枠組みといえるか迷った人もいるかもしれない。	標準

#### 合格のための学習法

〔3〕は例年、標準的な短答記述がほとんどである。ここで高得点を取るため、基本用語はしっかり覚えておくこと。そのうえで論述対策に臨みたい。〔1〕の大論述は、字数は多いものの内容自体は難しくない。指定されたキーワードをうまく活用して、解答を組み立てる練習を積もう。〔2〕の小論述で書きにくいテーマが出題されることもあるので、こちらの対策も行ってほしい。一問一答や用語集で暗記する用語数を増やすよりも、教科書を読んで歴史の流れを押さえるほうが論述対策としては有効である。添削指導も積極的に受けてほしい。